

伝統的功利主義からの離脱

—J.S.ミルの思想を通じて—

金子 光 一

問題の所在

本論文を作成するに当たって筆者の問題の所在は、次の2点に集約される。

まず、近年の社会福祉学界における偏った研究傾向である。今日の社会福祉学研究は、流動的な現状に目を奪われ、目の前の課題に翻弄されながら、何とか個々の課題に取り組む御用学的研究に傾き過ぎているように思う。社会福祉を学問として捉えるためには、実証的な地道な研究の積み重ねが重要であることはいうまでもない。¹

次に筆者は、社会福祉供給主体の営利事業の一般化傾向が各分野で進展している²今日こそ、功利主義的人間観・社会観に対する社会福祉学の視点に立った実証的研究の必要性を感じている。松井二郎も、「社会福祉再編期における社会福祉理論の課題」の中で、「わが国の社会福祉理論は、功利主義的人間観・社会観との対峙と社会福祉の必要性の思想的根拠（価値理念）の本格的な研究はほとんど手がつけられておらず、研究の空白部分となっているといわざるをえない。…それに対して1980年代のイギリスでは、反福祉国家のパラダイムとしてのサッチャー主義が登場したとき、新古典派経済学の功利主義的人間観・社会観と対峙し、社会福祉の必要性を根拠づける道徳哲学・政治哲学の研究が地道に取り組まれていたことを忘れてはならない」（松井2002: 209）と指摘している。³

また右田紀久恵は、イギリスの「社会福祉の思想」の中で、自由放任的自由主義の崩壊からコレクティヴィズム（国家干渉＝社会改良的自由主義、広義の社会主義）への移行過程に生じた政治思想や社会改良諸施策は、社会福祉思想との重要な関連があるとして、イギリスにおいて社会哲学を完成させたジョン・スチュアート・ミル(John Stuart Mill, 以下、ミルと略す)を取り上げ、「イギリスではこのような思想により自由主義的国家観が支持され、福祉国家の理念にも個人の自由・平等を最優先価値としてかかげる個人主義・功利主義の考え方が根底にあり、…個人の自由と社会の福祉との調和を、現実的な施策を通じて妥協や合意として成立させようとするのが、イギリス福祉国家の理念なのである。」(右田1999:263)と

述べている。

筆者は、今年3月刊行された『淑徳大学社会学部研究紀要』第37号の「J.S.ミルの福祉思想に関する一考察—フェビアン社会主義への影響—」において、ミルの思想の根底にどのような福祉思想があるか、また、そのミルの思想が初期のフェビアン協会のメンバーに如何なる影響を与え、福祉国家及び労働党の形成に貢献をしたかについて若干の考察を試みた。

しかし当然のことながら、ミルの思想はそこで論じた以上に広範囲に及び、特に、伝統的な功利主義からの離脱、そこで確立された「社会的利他」に関する思想や「人間の能力の涵養」に関する所見には、注目すべき先駆的内容が含まれている。

功利主義的人間観・社会観の狭さを克服し、新しい功利主義の考え方を確立したミルの思想の一側面を解明することは、社会福祉史研究において、また社会福祉原理論において重要な意義をもつものと確信している。そこで本論文においては、ミルが伝統的功利主義からの離脱という明確な問題意識の下で公にした1838年の「ベンサム論」(‘Bentham’)と1840年の「コールリッジ論」(‘Coleridge’), またミルの代表的著作である『経済学原理』(*Principles of Political Economy*, 1848), 『自由論』(*On Liberty*, 1859), 『功利主義』(*Utilitarianism*, 1861), 『自伝』(*Autobiography*, 1873)等からミルの思想の変遷過程を考察し、社会福祉理論の価値理念を解明する糸口を探究したいと考える。

1. ミルの功利主義形成過程

(1) 「精神的危機」からの脱出

ミルは、ジェレミ・ベンサム(Jeremy Bentham)とも親しく交流のあった父ジェイムズ・ミル(James Mill)の英才教育によって、14歳までに論理学や経済学の初歩を身につけ、1820年から1年間フランスに留学し、ベンサム主義者になった。その後、父ジェイムズや法律学者ジョン・オースティン(John Austin)⁴、法律学者ジョージ・グロート(George Grote)等を主要なメンバーとする「功利主義協会」(Utilitarian Society)に所属し、また、1824年4月に創刊された哲学的急進派の機関誌『ウェストミンスター・レビュー』誌(*Westminster Review*)⁵を通じて、哲学的急進派の論客となる。

しかしながら、1826年秋に訪れた「精神的危機」を経て、ミルはベンサム主義の限界を知る。その時彼を救ったのは、『自伝』によれば、サミュエル・コールリッジ(Samuel Coleridge)やウィリアム・ワーズワース(William Wordsworth)のようなイギリス・ロマン主義の詩人の感情と感情に彩られた思想を表現する詩であった。これまで啓蒙的理性主義を徹底的に教育されてきたミルは、その反動としてロマン主義思想に救いを求めた。

イギリス・ロマン主義は、ワーズワースとコールリッジの共著『抒情歌謡集』(*Lyrical ballads*,

1798) の出版をもって始まるとされる。彼らは、古典主義詩歌に対する抗議、地方的・国民的伝統への復帰、貧しいもの、農村生活への同情、独創性礼讃を行い、イギリス・ロマン主義の第一代を形成した。イギリス・ロマン主義は、詩の精神に貫かれた人間と社会における総合と創造の精神を示すものであり、(岩岡1990:187) このような田園志向のロマン派詩人の叙情性は、ミルの精神世界に大きな影響を与えた。

これまでミルにとって快苦こそが唯一の動機づけであった。しかし「精神的危機」によって「利己的な快樂も、非利己的な快樂も、私にとって快樂ではなくなってしまった」(Mill 1873: p.116)とあるように、快樂が消滅したことで、ミルの考えはベンサムが有した功利原理の根拠に対する否定に向かっていった。そして知的分析を重んじて感情を無視していたベンサム哲学から離脱し、知的プロセスと感情的プロセスの双方を重視する新しい功利主義を形成する。その過程においてミルが詩の重要性を認識したことは大きな意味をもっている。

ミルは次のように記している。「あらゆる作家の中で、コールリッジのみに私の心境に合った描写を見出し得た。」(Mill 1873:116) また、「(ワーズワースの) 詩から私は、より大きな人生の悪がこの世から全部取り去られた時に、幸福の永久の源となるのは何か、を教えられる思いがして、その詩の影響を受けると同時に自分が、よりよい、より幸福な人間になった気がした。」(Mill 1873:121 括弧内筆者)「ワーズワースの長所が誘因となって、私ははじめて私の新しい考え方で、同じような変化を経験しないままのそれまでの仲間たちの考え方からの離脱とを、公に宣言することになった。」(Mill 1873:122) ミルは、コールリッジから彼の哲学思想、特に社会・政治思想の影響を受け、ワーズワースから主として彼の抒情詩自体の与える人格上の内発的、感性的なものの重要性を認識したと考えられる。(柏 1997:3)

このようにミルは、ロマン主義思想から影響を受けることによって、あらゆるものに共通するような秩序ある啓蒙的合理主義が支配している社会では、個性は著しく狭められ、自らの意志に基づく自発的な活動は制限されるということを学び、詩的精神を尊重し、感情や理想を重視することの意義を見出したのである。そしてここでミルは、個人の内的陶冶を幸福の第一に必要なものと見なし、理性と良心に訴える道徳性(正邪)、想像力に訴える審美性(美)、人間の同朋意識に訴える共感性の重視へと発展する新しい見解の礎を築いたのである。

その後、功利主義的人間観・社会観の狭さを痛感したミルは、政治的急進主義のユニテリアンの牧師ウィリアム・ジョンソン・フォックス(William Johnson Fox)が行っていたサークルでハリエット・テイラー(Harriet Taylor)と出会い、彼女との交流を通じてその見解をより強固なものとする。ハリエットは、家政的な仕事を十分にこなすだけでなく、詩、音楽、文学、絵画に造詣が深く、イタリア語にも堪能で、宗教論争にも関心を示す多才な女性であった。(小泉1997:p.83)

1831年、ハリエットの夫ジョン・テイラー(John Taylor)が催した晚餐に、フォックス、ジ

ジョン・アーサー・ロウバック (John Arthur Roebuck), ジョージ・ジョン・グレイアム (George John Graham) 等と共にミルが招待され, その時ミルは初めてハリエットと出会った。(Mineka 1944:273) 丁度それは, ミルが詩と文学に救いを求め, 感情の重要性を認識することによって「精神的危機」を克服した時期であり, 詩を愛し, 自ら詩やエッセイを書く知的で文学的なハリエットにミルが惹かれたのは謂わば当然のことであった。

ハリエット・テイラーがミルにどの程度の影響を与えたか, それはミル本人が語っている賛辞に匹敵するものであったのか否かについては, 同時代人から現代の研究者に至るまで様々な見解があり, 評価も分かれるところである。

フリードリッヒ・ハイエク (Friedrich A. Hayek) は, 1951年, ミルとハリエットの豊富な書簡に基づいて, ミルの思想に対するハリエットの影響が偉大なものであったことを論証し, 所謂, 「ハリエット神話」(the Harriet Taylor Myth)を生み出した。(Hayek 1951)

またゲルトルード・ヒンメルファーフ (Gertrude Himmelfarb) は, 「ミルは自分の控え目な才能を, 彼女の重要な才能を補うものとみなした。彼女の才能は, 彼の資質, 識別力, 明確さに対して, 独創的, 創造的なものであった」(Himmelfarb 1974:256)と指摘し, ミルにとってのハリエットの重要性を論じている。

これに対してH.O.パップ (H.O.Pappe) は, 『J.S.ミルとハリエット・テイラー神話』(*John Stuart Mill and the Harriet Taylor Myth*)で, ハリエット賛美の問題点を多角的に検討している。またミルと同時代活躍したレズリー・スティーヴン (Leslie Stephen) は, 「ハリエットの影響力は, 彼の知性に対するよりも彼の感情に対するのであり, 彼の抽象的原理を社会の現実状態に適用し, それらの原理における人間の利益と共感とに対する関係をより明白かつ広範に評価するように彼を誘導したことである」(Stephen 1900: 59)と述べている。

しかしながら, ミルが詩や文学に「精神的な危機」からの救いを求めた後に, 文学的センスに溢れたハリエットと運命的な出会いをし, ハリエットがミルの研究計画に関わり, ミルの著作に関してよく論じ合ったことは事実であろう。矢島杜夫もミルの同時代人から現代の研究者の見解を詳細に分析し, 「ハリエットのミルに与えた影響は, 感情的, 創造的な側面であったといえよう」(矢島2001:48)と述べながら「ハリエットがミルに与えた影響は, ハイエクのこのような合理的な要素よりは, むしろ詩的な要素であったといえる」(矢島2001:50)と論じている。

(2) 「ベンサム論」

『ロンドン・ウェストミンスター・レビュー』誌 (*London Westminster Review*) に, 1838年8月に投稿した「ベンサム論」と, 1840年3月に公にした「コールリッジ論」は, ミルが「精神的危機」から抜け出し, 著しい思想的成長を遂げたことを示すものであり, また伝統

的功利主義からの離脱という明確な問題意識の下で書かれた論稿として重要である。⁷

ミルがあえてこの2人の思想家を取り上げたのは、彼らがイギリスの時代の精神と転換を先導した偉大で基本的な思想家(seminal minds)と捉えていたからであり、特にベンサムは、現存する学説や制度に対立し新しい真理を認識でき、一方のコールリッジは、現存する学説や制度の中に内在していた真理を識別する力をもっていたからである。ミルは次のように述べている。「ベンサムに対しては、現存の学説や制度と相対立する諸真理を一層詳細に識別することが課せられ、コールリッジに対しては、現存の学説や制度の内に存在する無視された真理を闡明にすることが課せられていたのである。」(Mill 1838:133)

「ベンサム論」は概ね6つの段落で構成されている。第1段落(Mill 1838:132-133 1.19)は、ベンサムとコールリッジの類似点と相違点を明らかにし、2人に着目する理由、意義等が述べられている。第2段落(Mill 1838:133 1.20-144 1.18)では、ベンサムを批判的思想家としてばかりではなく、積極的な思想家として評価し、彼が誤謬に代わる真理を樹立するまでは、誤謬を攻撃しない姿勢を好意的に述べ、彼の独自性が、真理探究の際に行われる詳細法(the method of detail)を適用した主題に見られ、そしてその方法を厳格に固執した中に存在することを明らかにしている。第3段落(Mill 1838:144 1.19-151 1.29)では、ベンサムの詳細法を評価する一方で、ベンサムが他の思想家から教訓を引き出すことができず、彼の人間性及び人生に関する一般的概念が偏狭であったことを指摘している。第4段落(Mill 1838:151 1.30-156 1.15)では、第3段落の主張をさらに具体化し、特にベンサムが人間性の有力な構成要素に価値を見出していなかった点をベンサム道徳哲学の限界として明記している。第5段落(Mill 1838:156 1.16-170 1.4)では、最初に「ベンサムの関心が本来の倫理学研究よりも法学研究の方向に向かっていたことは、世界にとって幸福なことであった」(Mill 1838:156)と述べ、法律改革者としてのベンサムの業績を高く評価している。第6段落(Mill 1838:170 1.5-175)では「功利性の原理」に関して、ベンサムの説に同意するが、その原理の重要性を強調する程度が自分とは異なっていると述べ、ベンサムが「性格の形成及び行為が行為者自身の精神に及ぼす影響」(Mill 1838:171)について評価する能力に欠けていた点を指摘している。全体を通じて、ベンサムの分析の問題点を痛切に批判しながら、彼の多くの功績についても明確に述べられており、ベンサムに対して公平な評価を下そうというミルの意図が読み取れる。

ここでは、本論文の問題意識に基づき、「精神的危機」を経てベンサム主義の限界を悟った事由と、伝統的功利主義からの離脱要因を探りたい。それは、上記の第3・4段落及び第6段落に明確に示されている。

「イギリスの改革の父」ベンサムは、「この時代と国家の偉大な破壊的思想家、大陸の哲学者たちの言葉でいえば、偉大な批判的思想家」(Mill 1838:134)であり、また同時に、それに

代替する真理を提出する深遠な哲学者であった。しかしながら、ベンサムは他の思想家から学ぶ姿勢をもたず、彼以前の卓越した思想家に対して徹底的に軽蔑を抱いていた。人間性や人間の生活に関する主題は広汎にわたるにも関わらず、彼自身の精神及び類似する精神のみから供給される資料のみで、それを解明することはできない。そのことをまずミルは指摘している。

次に、「人間性の中で最も自然で最も強烈な感情の多くのものに対して、彼が何の同情ももっていないかった」(Mill 1838:p.148) ことに対しても痛切に批判している。そのことをミルはベンサムの想像力の欠如と貧弱な彼の経験に起因すると述べ、ベンサムを「人間性と人生に関する一般的概念が狭いために、著しく貧弱な諸前提しかもっていない人」(Mill 1838:150) と断言し、彼が「人間が精神的完成を一つの目標として追求できる存在であることを少しも認めていない」(Mill 1838:152) 点を鋭く指摘している。ミルが主張するベンサムの限界は、人間性の道徳的な部分ばかりではなく、名誉心と人間の尊厳の意識、例えば、他人の意見に左右されず、活動を継続するための人格の高揚と墮落の感情等の人間性を構成する有力な要素に対して価値があると考えられなかった点にあることを論じている。(Mill 1838:153)

伝統的功利主義からの離脱要因についてミルは、最後の第6段落で述べている。その書き出しは次の通りである。「われわれは、今までベンサムの哲学の概略を述べてきたが、彼の哲学のうちで他の何ものにもまして彼の名と一体化している第1原理について殆ど触れなかったことに、読者は驚かれるかもしれない。それは『功利性の原理』、すなわち彼が後になって『最大幸福の原理』と名づけたものについてである。」(Mill 1838:170)

ここでミルは、功利性の原理の基本的な考え方に対してベンサムに同意しているが、その原理の重要性を強調する程度については、ベンサムと意見を異にすることを明言している。具体的には、ベンサムの行為の道徳性を決定する場合、行為結果に関する考察においてベンサムは正しいが、さらに分析を進める過程においては、性格の形成及び行為が行為者自身の精神構造に及ぼす影響について、より一層優れた知識が必要であると述べている。すなわちミルは、ベンサムが行為及び性格に対する道徳的観察こそが、唯一最高の観察方法であると考えていた点に偏りがあると指摘している。(Mill 1838:171-172)

ミルは、人間の行為を道徳的側面、審美的側面、共感的側面という3つの部分に分け、第1の側面では、理性と良心に、第2の側面では想像力に、第3の側面では人間的共感にそれぞれ訴えているとした。「第1の側面に従って、私たちは是認または否認し、第2の側面に従って、私たちは賞賛または軽視し、第3の側面に従って、私たちは愛したり憐れんだりまたは嫌悪したりする。行為の道徳性は、その予知できる結果によって決まる。」(Mill 1838:172) ところがベンサムの場合、第1の側面に固執して、第2、第3の側面を無視している。ミルは次のように述べている。「一般の道徳家とベンサムの誤謬は、あとの2つの側面を全く無視

することであり、これはベンサムの場合、特に顕著である。」(Mill 1838:173)

このように人間がもつ本性の活動そのものの価値と役割を認めず、人間の尊厳の意識に価値を見出すことができず、人間の行為を道徳的側面のみからしか観察していなかったベンサムの哲学に対して、ミルは限界を認識したと考えられる。このことは、社会福祉学の視点から考えれば、極めて重要な意味をもつ。社会福祉の思想の基盤には、尊く侵しがたい人間の存在を認める「人間の尊厳」の理念がある。そして、そのことを重視しながら人間の行為を道徳的側面、審美的側面、共感的側面という3つの側面から理解しようと試みたミルの先駆性は、社会福祉学の発展において有益であった。ミルがベンサムのように人間性の中で最も自然で最も強烈な感情に関する事項に無頓着で、人間の理性と良心に訴える道徳的側面ばかりに目を奪われていたら、おそらく伝統的な功利主義から離脱することはできなかったであろう。

「ベンサム論」の考察の最後に、ミルに備わっていて、ベンサムに欠如していたものを明らかにしたい。それは想像力である。(Mill 1838:148) ミルは、「想像力こそ、一人の人間が他人の精神と境遇との中に入り込むことを可能にする力である」(Mill 1838:149)と述べ、さらに「この力なしには、どんな人も、境遇が現実を試みかつ引き出してくれるものの他は、自分自身の性質についても、また同胞たちの性質についても彼らの外部的行為の観察に基づいて構成することができたような一般以上には何も知ることができないのである」(Mill 1838:149)と指摘している。この見解は、目の前の課題に翻弄されながら、何とか個々の課題に取り組む今日の社会福祉研究への警告を発しているように筆者には思えてならない。

(3) 「コールリッジ論」

ミルが「コールリッジ論」を執筆したのは、コールリッジの哲学思想、特に社会・政治思想から大きな影響を受けたためである。ミルは1834年4月15日付けのプリングル・ニコル(Pringle Nichol)宛の書簡の中で、「コールリッジ以上に私の思想と性格に大きな影響を与えた人は殆どいない」(Mineka 1963:221)と記している。またミルは、ベンサムとは対極に位置するコールリッジの思想を解明することによって、伝統的功利主義の欠点を補完し新しい功利主義を構築したいと考えていた。

「コールリッジ論」は概ね6つの段落で構成されている。第1段落(Mill 1840:177-184 1.15)は、「ベンサム論」の第1段落同様、ベンサムとコールリッジの類似点と相違点を明らかにし、両者が相互に補完的関係にあると述べられている。第2段落(Mill 1840:184 1.6-191 1.3)では、コールリッジの見解を、伝統的ドイツ哲学からの継承と理解しながら「ドイツ＝コールリッジ学説」(the Germano-Coleridgian doctrine)と称し、その解説を行っている。第3段落(Mill 1840:191 1.14-206. 1.10)では、ヨーロッパの実践哲学の状態を概観し、市民社

会の必須条件を3つ挙げて論じている。第4段落 (Mill 1840:206 1.11-212 1.25) では、精神界の事柄に対する信念の支配的な風潮を、ベンサムと関連させながらコールリッジの思想を明らかにすることによって論じている。またここでは、コールリッジの「教会」の理論が展開されている。第5段落 (Mill 1840:212 1.26-219 1.25) では、第4段落の主張をさらに具体化し、コールリッジの「憲法」の理論、自由放任主義に対する国家の役割に関する見解を明記しており、ミルはそれを積極的に評価している。第6段落 (Mill 1840:219 1.26-226) では、土地所有に関するコールリッジの考え方について当時の学説を交えて論じている。全体を通じて、コールリッジに対するミルの理解は、彼の思想の核心部分であるロマン主義哲学まで至っておらず、あくまでも彼の社会・哲学思想を、18世紀の啓蒙思想に対する反動の結果として捉えるに留まっている。また「ベンサム論」で展開された痛切な批判をコールリッジには行っておらず、むしろこれまでの自分の思考とは対立するコールリッジの所見を最大限理解し、自ら有する欠陥を補おうとするミルの姿勢が読み取れる。

ここでは、本論文の問題意識に基づき、ミルが新しい功利主義を構築する過程に多大な影響を与えたコールリッジの思想を考察したい。特に、第3段落で展開された市民社会の必須条件、第4段落で論じられた「理念」(Idea)及び『ナショナルティ』(nationalty)⁸、第5段落で明確に示されている自由放任主義への批判に焦点を当てる。

まず「コールリッジ論」の中でミルは、市民社会の必須条件として、教育制度、恭順または忠節の感情、国民的感情という原理を挙げている。ミルは、服従の習慣に反抗する要素が残されていた社会、すなわち市民社会には「第一に、市民と見なされたすべての人々に対して、…幼少時代にはじまり生涯継続される一つの教育制度が存在していた」(Mill 1840:193)と述べ、教育制度の重要性を唱えている。また「永続的な政治社会の第2の条件は、何らかの形で恭順または忠節の感情が存在する」ことで、「この感情はその対象とするものが様々に変化し得るものであって、その存在は決してある特殊な統治形態に限られてはいない」(Mill 1840:194)と論じている。さらに「第3の必須条件は、国民的感情という強力で活発な原理である」(Mill 1840:195)とし、そこでの原理は、「共感の原理(a principle of sympathy)であり、敵意の原理ではなく、結合(union)の原理であって分離の原理ではない。我々が指しているのは、同じ政府のもとに生き、また同じ自然的ないし歴史的境界の内部に含まれている人々との間にある共通利益の感情なのである」(Mill 1840:195)と述べ、市民を結びつけている絆(a value on their connection)を重視している。この指摘は市民連帯の考え方であり共生の思想に繋がる重要な指摘と考えられる。

次に、ベンサム哲学の中で欠落していた現存の制度の価値を評価しながら、人は理性によって、本来無限者に属する「理念」を導き出すことができ、あらゆる原理は「理念」によって現実化されるとコールリッジは考えていたが、ミルは社会的制度の中にこの「理念」を見

出そうとするコールリッジを評価している。ミルは次のように論じている。「どのような制度でもそれを取り扱う場合のコールリッジの方法は、彼が制度の『理念』と名づけているもの、すなわち普通の言葉では制度に含まれている原理と呼ばれるようなものを研究することである。」(Mill 1840:207) 例えばミルは、コールリッジが有した「国家教会」(national church)の理念を取り上げ、それが一つの基金として国土の一部を有するか、その生産物の一部に対する権利を有するかであり、その基金を社会の文明と知識の向上のために使うべきであるという彼の主張を積極的に支持している。(Mill 1840:208)

さらにミルは、コールリッジが「古典派経済学の祖」と目されているアダム・スミス(Adam Smith)及び古典的自由主義経済学派が主張するレッセ・フェール(laissez-faire)の原理に反対した点も評価し、この原理に基づく富の機構が生み出した新しい矛盾に直面して、彼が国家の積極的な役割を提唱したことを重視している。ミルの言葉を借りると、「コールリッジは、放任主義すなわち政府が何もしないことに越したことはないという理論に反対している。…

(乱用を防止するための諸制度は必要であるが) 国家は自らを助けることのできない国民の中の大部分を助けるための一つの共済組合(a great benefit society), または相互保険会社(mutual insurance company)であると考えられるべきである。」(Mill 1840:218) この表現の中にミルの「社会的利他」思想の萌芽が見られる。これに関しては、次節で詳しく論じる。

ミルはこの2つの論稿で、ベンサムにはかなり厳しい態度を取っているのに対して、コールリッジを好意的に評価している。ミルは『自伝』の中で次のように述べている。『『コールリッジ論』に関する限り、私は急進主義者や自由主義者のために書いたのであって、異なった派の著述家たちが書いたものの中で、その知識から彼らが最も大きな改善を引き出せそうなことを強調するのが私の仕事であった。』(Mill 1873:167)

2. ミルの功利主義に見られる「社会的利他」思想

伝統的功利主義からの離脱を試みたミルは、その後どのような見解を確立したのか、彼が模索した新しい功利主義の所見の中からそれを明らかにしたい。ミルの功利主義は、「最高の目的を述べる原理」と「その目的を達成するためにしなければならない責務を述べる原理」で構成されているが、ここではミルの新しい功利主義の特徴を浮き彫りにするために、「最高の目的を述べる原理」、すなわち価値に関する原理に焦点を当てて検証したい。

ミルは、『功利主義』を刊行する2年前の1859年『自由論』(*On Liberty*)を公にしているが、その中で「功利はすべての倫理的問題に対する究極的な判断規準である」と考える(Mill 1859:14)と述べている。これはベンサムや父ジェームズが有する功利主義の主要な教義からの継承を裏づけるもので、功利原理が最大多数の最大幸福を目指す原理であると考えていたことを

示している。

ベンサムは、「功利性の原理」(principle of utility)を次のように捉えていた。「功利性の原理とは、その利益が問題になっている人々の幸福を、増大させるように見えるか、それとも減少させるように見えるかの傾向によって、または同じことを別の言葉で言い換えただけであるが、その幸福を促進するようにみえるか、それともその幸福に対立するようにみえるかによって、すべての行為を是認し、または否認する原理を意味する。」(Bentham 1789:65)

ベンサムとミルの差異は、幸福そのものの捉え方に見られる。ベンサムによる「功利」(Utility)とは、「ある対象の性質であって、それによってその対象が、その利益が考慮されている当事者に、利益、便宜、快楽、善、または幸福を生み出し、または、危害、苦痛、害悪または不幸が起こることを防止する傾向をもつものを意味する。ここでいう幸福とは、当事者が社会全体である場合には、社会の幸福のことであり、特定の個人である場合には、その個人の幸福のことであり。」(Bentham 1789:66) すなわちベンサムにとっての幸福は、利益、便宜、快楽、善等であり、不幸は危害、苦痛、悪等である。

これに対してミルの幸福の捉え方は、ベンサム同様「幸福は快楽を意味し、また苦痛を欠いていることを意味しており、不幸とは苦痛を意味し、また快楽を欠いていることを意味している」(Mill 1861:278)としながら、「快楽及び苦痛からの自由が、唯一の目的として望ましいものである。さらにすべての望ましいもの（それは功利主義においても他説同様多数存在する）は、それ自身に固有の快楽のために望ましいか、快楽を増やし苦痛を避ける手段として望ましいかのどちらかである」(Mill 1861:278) と質的快楽を含んでいる。つまりミルは、前述の「ベンサム論」で論じたベンサムの人間性の理解に対する欠陥や人間の行為を道徳的側面からのみしか観察していなかった誤謬を回避している。そしてその快楽は個人の快楽に留まらず、個人を含んだ社会全体の幸福 (general happiness) を含んでいた。

『自由論』を執筆した段階で、ミルは次のように論じている。「究極的な判断規準である功利は、進歩する存在としての人間の恒久的利害に基礎をおく、最も広い意味での功利でなければならない。これらの利害が、各人の自発性を外的統制に服従させることを正当化するのは、他の人々の利害に関係する各人の行為に関してのみである。」(Mill 1859:14) また『功利主義』において、「功利主義は、行為者自身の最大幸福を基準とせず、社会人類の幸福を合わせた総和の最大量を基準とする」(Mill 1861:282) と述べている。

このようにミルは、功利性の概念をできるだけ拡大して、時代の要請に応えようとした。また彼独自の究極的目的として、最大幸福の原理 (快楽主義) と最大多数の原理 (社会的利他の原理)、言い換えれば、「自分の善」と「他人の善」を掲げながら、自らの価値論を展開している。筆者は、この社会的利他の強調がミルの功利主義の大きな特徴と考える。

ミルは人類の社会的感情の根底に利他心を位置づけ、次のように述べている。

「功利主義倫理は、他人の善のためならば自分の最大の善でも犠牲にする力が人間にあることを認めている。犠牲それ自体を善と認めないだけである。幸福の総量を増やさない犠牲、あるいは増やす傾向をもたない犠牲は無駄だと考えるのである。功利主義が称える自己放棄は、唯一他人の幸福またはその手段への献身だけである。この場合に他人とは、人類全体であるか、人類の全体的利益の範囲内にある個人であるかは問わない。」(Mill 1861:288)さらに、「社会連帯が進み、社会が健全に成長すれば、事実誰もが他人の福祉(the welfare of others)にますます強い個人的関心を抱くようになるばかりか、誰もが自分の感情と他人の善をますます同一視するように、少なくとも事実上他人の善をますます考えるようになる」(Mill 1861:304)と論じている。

このようにミルは、社会が健全に成長すると究極的には誰もが他人の善を考えるようになる主張し、その社会の成長のために教育制度等を通じた「人間の能力の涵養」が不可欠であるという考えは、前述の「コールリッジ論」の中でも論じられている。ハロルド・ラスキ(Harold J. Laski)がミルの自伝の序文で「彼が関心を寄せた究極的なことは、人間の精神の向上であった。それが、結局は、彼が書いたもののすべての根底であった」(石上1957:225)と指摘しているように、ミルは人間の能力の涵養に大きな関心があり、それが福祉の向上に繋がると考えていた。そしてミルは「何らかの意味で苦痛をとまなう貧困は、個々人の分別と慎慮とに結合された社会の知恵によって、完全に絶滅されるであろう。…人生の有為転変やその他の事態に伴う失望について言えば、これらのものは主として、無思慮か節度なき欲望かまたは不良あるいは不完全な社会制度か、いずれかの結果である」(Mill 1861: 286)と断言している。

ミルが社会的害悪と、自然的と思われる個人的害悪の除去の可能性を信じ、人間世界の限りない改善に対する信仰を提言したのは、ミル自身が功利主義の影響力を活用して幸福の概念を見出していたことを示していると考えられる。ロバート・ピンカー(Robert Pinker)によれば、社会科学へのミルの主要な貢献は理論よりむしろ方法論の分野においてであった。そして「彼の社会科学は社会進化論よりもむしろ功利主義に由来していた。彼はひとたび社会福祉問題に関して集合主義に傾く立場(collectivist position on social welfare issues)を採用したからには、実際の効果をあげるために彼の影響力を最大限活用した。」(Pinker 1971:69)

モリス・ギンスバーグ(Morris Ginsberg)は次のように指摘する。「ミルは幸福と快楽の概念を明確に区別し、快楽が唯一の望ましい膳ではないということを認めた。彼は快楽の概念を拡大し、その中に他者の福祉を促進することを取り入れた。そして、社会及び個人の福祉のために市場力を規制する国家のより積極的な介入を喜んで賛成した。」(Morris Ginsberg 1959:9)

このようなミルの功利主義に見られる「社会的利他」の思想は、フランスのサン・シモン

(Saint-Simon)やシャルル・フーリエ(Charles Fourier)等の影響によるところが大きい。

ミルはフランス留学中よりフランスの社会思想界に関心をもっており、彼らの空想的社会主義(Utopian Socialism)を高く評価し、その学説に対して敬意を表していた。「社会の害悪を列挙するにあたって、昔の平等主義者は、いつも、道徳的立場からする現存社会体制の批判という線で留まってしまっていた。ところが、彼ら(サン・シモンやフーリエ)の後継者である現在の社会主義者は、一層鋭い見透しをもっており、社会の分析を一層進めている。」(菊川 1966:141 括弧内は筆者)

アメリカ独立戦争に率先して参加したサン・シモンは、フランス革命後、消費的・浪費的な特権階級を敵対視し、これらの階級に対する「産業者」の優位を主張した。またフーリエは、幼少から商業における虚偽と無秩序を批判し、失業、貧困等の矛盾を抱える資本主義社会に対して協同組合を基盤とする理想社会の実現を訴えた。

特に、ミルはフーリエ主義の有する各成員の最低限生活を保障し、残りの生産物を労働の量、出資額及び才能の程度で分配する見解を、最も優れたものと考え、社会運動活動における労働者の生産協同組合の将来に期待をかけている。そのことはミルが1848年に公にした『経済学原理』(*Principles of Political Economy*)の主張から読み取ることができる。「結局、しかもおそらくは予想以上に近い将来において、私たちは、協同組合の原理によって一つの社会変革に至る道を持つことができるであろう。」(Mill 1848:698)

杉原四郎が指摘するように、生産協同組合が資本主義体制下で競争にさらされていくことは、多くの困難が伴う。営利企業化することで存続をはかっていく道を捨てて、制度的変革の原点という素志を貫き通すことが如何に大変な作業であることは、ミル没後の生産協同組合運動の歴史が示している。しかしながら、その困難を乗り越えていく過程で、市民の人間性の向上と知的発展が可能になるというのが、まさにミルの思想である。(杉原1999:32)

人類の進歩と幸福とを念願し、一身の利益と快楽をむさぼる利己主義者を軽蔑し、最大多数の原理(社会的利他の原理)を唱えたミルは、19世紀中期に「古典派」から「新古典派」への分水嶺の役割を担い、社会福祉原理論の発展の基礎となる重要な主張を展開した。

終わりに

社会福祉理論の価値理念に関する研究の重要性は、社会福祉学界で指摘されて久しいが、それに関する実証的研究は希薄である。筆者は、イギリスの社会福祉史を専門とする立場から、ミルの思想の変遷を通じてその価値理念を解明する糸口を模索した。そしてその背後には、冒頭の問題意識があった。

今日の日本の社会福祉領域において市場原理主義は、急速に台頭している。分権化や規制

緩和と連動して社会福祉領域に市場原理を大幅に導入することによって、肥大化した官僚的な社会福祉体制の弊害を抜本的に改革することを目指している。これはここ10年の保育所改革や介護保険導入に関わる議論の中で加速的に強まった印象を受ける。ただここで改めて考えてみたいのは、社会福祉領域における市場原理の有効性である。増殖原理と競争原理から構成される市場原理が、果たして複雑な現代社会の社会福祉関連諸問題を解決する万能薬となり得るであろうか？

ミルは、自由経済体制における市場原理が華やかなりし時代を生き、伝統的功利主義の教義をベンサムや父ジェームズから学び、そしてその教義を志向する仲間たちとそれを共有した人物である。そのミルが、これまでの功利主義的人間観・社会観から離脱し、新しい功利主義を構築し、独自の見解に基づく社会体制を目指したのは、父が亡くなった1836年以降である。今から170年近く前のイギリスの時代背景が、現在の日本とは大きく異なることはいうまでもないが、ミルが伝統的な功利主義からの離脱を試みたのは、最大多数の幸福を追求する過程で、人間がもつ本性の活動そのものの価値と役割を認め、人間の尊厳の意識に価値を見出すことができたからに他ならない。またミルは、人間の行為を道徳的側面、審美的側面、共感的側面に分け、特に想像力に訴える第2の側面と人間的共感に訴える第3の側面を重視し、そこから人類の社会的感情の根底に利他心が存在することを明らかにした。さらにミルにとって人生の最高価値は、物質的満足ないし感官的快楽ではなく、人間がもつ能力の最大限の発展であった。そして彼は、この最高価値達成のため精神的自由を主張することに生涯を捧げ、コールリッジ同様、自由放任や市場原理がそれに最善の方法であるとは考えていなかった。

ミルが展開した新しい功利主義の見解の中には、営利事業の一般化傾向が各分野で進展している日本の社会福祉の動向に一石を投じる主張であり、それは現状に対して再考を迫る説得力をもっていると考えられる。

<註>

- 1 筆者は、自分自身の日々の怠惰な研究活動を反省しながら、そのことにかかり拘りをもっているつもりである。
- 2 営利企業や営利事業者の福祉サービスへの参入は、社会福祉基礎構造改革に始まったものではないが、近年加速的な傾向にある。現在、介護保険制度の下で、いくつかの営利事業者が都道府県から指定事業者の指定を受けており、特にホームヘルプ派遣、訪問入浴、福祉用具貸与等には、多くのビジネスが参入している。例えば、ホームヘルプ事業では、セコム、ニチイ学館、コムスン、ベネッセコーポレーション等が全国展開している。また、これまで認可保育所の設置主体は、「保育事業の公共性、純粋性、永続性の確保」という1963（昭和38）年の厚生省通知に基づき、原則として自治体と社会福祉法人に限られていたが、2000（平成12）年4月から、それを企業やNPO（非営利

組織), 幼稚園等の学校法人, 個人にまで広げられた。

- 3 右田紀久恵も『社会福祉研究』第85号において, 「社会福祉理論(原理)を根拠づける価値理念の追求」を改めて強調している。社会福祉理論の価値理念に関する研究の重要性は, 社会福祉学界で指摘されて久しいが, それに関する実証的研究は希薄である。筆者は, 自由と平等, 社会的公正等と関連させながら, 社会福祉理論の価値理念, 特に社会福祉の政策理念における平等の問題について, 大学院の「社会福祉政策経営論」の授業の中で, 主要なテーマとして議論している。
- 4 オースティンは, ベンサムやミル父子と親交があり, ベンサム等が有した法思想に感化されていた。彼の分析法学は, 彼の死後注目され, 今日の英米法学の主流をなす分析法学を生んだ古典の一つとして評されている。
- 5 ミルは, 1835年『ウェストミンスター・レビュー』誌の実質的な主筆となり, 翌年同誌が『ロンドン・レビュー』(*London Review*)と合併して『ロンドン・ウェストミンスター・レビュー』(*London Westminster Review*)になった後, 1837年には経営者も兼ねて, 1840年まで編集と執筆とに尽力した。この間彼は, 18号にわたって, 27篇の論文を同誌に掲載している。
- 6 ただイギリスのロマン主義思想は混在していたため, 大陸のような18世紀の啓蒙思想に対する「反抗」として捉えることは必ずしもできない。
- 7 John Stuart Mill and Jeremy Bentham, *Utilitarianism and Other Essays*, (1987) Penguin Booksの中に, 「ベンサム」(‘Bentham’)と「コールリッジ」(‘Coleridge’)が掲載されている。そこには, ミルが晩年これまでの論文を集めて1867年に刊行した『論説と討論』(*Dissertations and Discussions*)から抜粋したと記されている。
- 8 nationality という語は造語であり, ミルは国家財産(national property)の意味でこの用語を使っている。nationality の印刷ミスという指摘もあるが, ここでは原文通り「ナショナルティ」(nationalty)とした。

<文献>

- Bentham, J., (1789) *From An Introduction to the Principles of Morals and Legislation* in J.S.Mill and Jeremy Bentham, (1987) *Utilitarianism and other Essays*, Penguin Books
- Ginsberg, M., (1959) *Law and opinion in England in the 20th century*, London : Stevens
- Hayek, F.A., (1951) *John Stuart Mill an Harriet Taylor: their friendship and subsequent marriage*, A.M.Kelly, New York
- Himmelfarb, G., (1974) *On Liberty and Liberalism, The Case of John Stuart Mill*, A. A. Knopf, distributed by Random House, New York
- Laski, H.J., (1958) *Preface*, in John Stuart Mill, *Autobiography*, London : Oxford University Press
- Mill, J.S., (1848) *Principles of Political Economy*, London: John W. Parker, West Strand, New edition (1909) London: Longmans, Green & Company, Reprinted (1987) by Augustus M. Kelley Publishers
- Mill, J.S., (1859) *On Liberty*, in *On Liberty and other writings*, (1989) Cambridge University Press
- Mill, J.S., (1861) *Utilitarianism* in J.S. Mill and Jeremy Bentham, (1987) *Utilitarianism and other Essays*, Penguin Books
- Mill, J.S., (1873) *Autobiography*, , Penguin Books (1989) (=1960, 朱牟田夏雄訳『ミル自伝』岩波文庫)
- Mill, J.S. and Jeremy Bentham, (1987) *Utilitarianism and Other Essays*, Penguin Books
- Mineka, F.E., (1944) *The Dissidence of Dissent, The Monthly Repository, 1806-1838*, Univ. of North Carolina Press

Mineka, F.E. ed., (1963) *Collected Works of John Stuart Mill*, Univ. of Toronto Press
 Pappé, H.O., (1960) *John Stuart Mill and the Harriet Taylor Myth*, Cambridge University Press
 Pinker, R.A., (1971) *Social Theory and Social Policy*, Heinemann Educational Books Ltd.
 Stephen, L., (1900) *The English Utilitarians*, vol.3, A. K. Kelly, Reprints of economic classics,
 New York, 1968

泉谷周三郎・大久保正健(2000)『ミル『自由論』再読』木鐸社
 石上良平(1957)『英国社会思想史研究』創文社
 岩岡中正(1990)『詩の政治学』木鐸社
 右田紀久恵(1999)「社会福祉の思想」仲村優一・一番ヶ瀬康子『世界の社会福祉・イギリス』旬報社
 小泉仰(1997)『イギリス思想叢書10 J.S.ミル』研究社出版
 菊川忠夫(1966)『人と思想 J.S.ミル』清水書院
 杉原四郎・山下重一編(1979-1997年)『J.S.ミル初期著作集(一)~(四)』御茶の水書房
 杉原四郎・山下重一・小泉仰責任編集(1992)『J.S.ミル研究』御茶の水書房
 杉原四郎(1999)『ミル・マルクス・エンゲルス』世界書院
 中谷猛・足立幸男編著(1994)『概説 西洋政治思想史』ミネルヴァ書房
 古川孝順(2002)『社会福祉学』誠信書房
 古川孝順(2003)『社会福祉原論』誠信書房
 松井二郎(2002)「社会福祉再編期における社会福祉理論の課題」阿部志郎他編『戦後社会福祉の総括
 と二一世紀への展望II 思想と理論』ドメス出版
 矢島杜夫(2001)『ミル『自由論』の形成』御茶の水書房

〈付記〉

1994(平成6)年3月に発行された『淑徳大学研究紀要』(現『淑徳大学社会学部研究紀要』)第28号に論文「ピアトリス・ポッターの思想形成過程」を掲載させて頂いてから本号第38号まで、創立30周年記念号(第30号I・第30号II)を含み、11年間12号連続で雑文を投稿させて頂いた筆者であるが、本紀要への投稿を最後にしばらく筆を置くことになった。筆者にとって本紀要は、大切な研究活動の成果の場であると同時に専任教員としての責任を果たす重要な場であった。これまでの筆者の未熟な論稿に対し、各方面からご批判・ご鞭撻を頂けたことは本当に幸いであった。この場を借りて、心よりお礼申し上げたい。

Departure from Traditional Utilitarianism: Thoughts on John Stuart Mill's Ideas

Koichi KANEKO

This paper attempts to consider the process by which John Stuart Mill broke away from traditional utilitarianism and its considered disadvantages to establish a new form of utilitarianism.

The first chapter, “The process of establishing Mill’s utilitarianism,” is made up of three parts, (1) Escape from the mentality crisis, (2) “Bentham,” and (3) “Coleridge” . First of all, I made the point that Mill’s ideas were influenced by some British Romantic poets such as Samuel Coleridge and William Wordsworth. In addition to this, I referred to the effect that his relationship with Harriet Taylor had on changing Mill’s thoughts. Secondly, I analyzed Mill’s papers, “Bentham” and “Coleridge,” which were written with the clear concept of departing from traditional utilitarianism. In order to do this, I concentrated on two essays published in the *London Westminster Review* in 1838 and 1840 and considered the process by which Mill’s thoughts evolved.

In the second chapter, I tried to clarify Mill’s ideas on new utilitarianism from the point of view of “social solidarity” . Previously, Mill had shared the ideas of traditional utilitarianism with Bentham and of his own father James Mill. I concluded in this paper that the reason why John Stuart Mill attempted to depart from traditional concepts was that he discovered the value of the principles of human rights and social justice. He classified human behavior into three aspects: aesthetic, beauty and sympathetic. In this paper I aimed to consider the second and third aspects and to evaluate their significance.